

## 安居院流唱導における国文学と美術史の連絡

— 普賢菩薩・十羅刹女像を中心として —

### LINKING THE LITERARY ART OF BUDDHIST PREACHING AND ART HISTORY

The Case of the Agui School and Fugen-Jūrasetsunyo Imagery

Michael JAMENTZ\*

The founder of the Agui school of Buddhist preaching, Chōken Hōin, 1126-1203, is known for both his eloquence as well as his intimate relationship with the imperial family. In recent years, the *hyōbyaku* texts of his preaching have become the focus of scholars specializing in various fields of Japanese literature. While attention has been focused on this literary production and its performance in Buddhist ceremonials, little interest has been shown in the pictorial production that seems to have accompanied it.

An examination of the records of the preaching of the Agui school reveals that from late Insei times to the end of the Kamakura era, the image of the bodhisattva Samantabhadra (Jpus., Fugen bosatsu), often in combination with that of the ten female demons, known as *rasetsunyo* in Japanese, was employed at funerary services for members of the imperial family. The use of this relatively rare image type seems to have coincided exclusively with

---

\*マイケル・ジャメント カリフォルニア大学ロスアンゼルス校政治学科卒業。国際基督教大学日本語コースに学ぶ。南カリフォルニア大学に修士論文「平安作り物語における親子関係の儒教的考察」を提出。ハーバード大学博士課程修了。現在博士論文「信西一門と院政期文学：特に安居院唱導と女院文化圏」を執筆のため京都在住。

services at which Agui priests preached. On several of these occasions, the image was painted on the deceased's clothing, and sometimes, by members of the court.

Knowledge of this image and its usage helps us in understanding at least two *shakkyōka* that have heretofore been considered somewhat inexplicable. Each verse, one by Saigyō and the other by Shunzei, anomalously combines language from disparate chapters of the *Lotus Sutra*. The chapters are precisely those in which Fugen and the *rasetsunyo* appear. Thus it may be surmised that these verses reflect the imagery that later came to be associated with the Agui school.

今日は、このような機会を与えて下さりましてありがとうございます。日本語で研究発表するのは初めて、ましてこのような主題で公に発表させて頂くのは、前代未聞ではないかと少しは自負しておりますが、現在論文として纏めております内の一部でもございますので、皆様からのご意見や、ご助言など頂ければとおもいます。

関連する事柄が極めて多岐にわたりますが、報告時間の関係から、全てを克明に述べつくす事は、到底不可能ですので、今回は、いくつかの不可欠な要点を中心に報告させて頂きたいとおもいます。

最初に、配布物の説明をさせていただきます。資料1、は今日の話の軸になる信西と澄憲の一族のデータをまとめたものです。この略系図を前提にしてお話しさせていただきます。そして、資料2は、関係文献です。

先ず今日の発表の歴史的背景と概略を簡単に説明させて頂きたいとおもいます。院政期の安居院流唱導の始祖、澄憲については、説法の弁舌の巧みさと皇室との親密関係の点ではよく知られていますが、美術史上は、未だ殆ど認識されていませんし、いうまでもなく、美術と文学史の関係は研究の対象になっておりません。ところが、唱導関連の資料を通観しますと、代々の安居院流の僧

達は、久しく同様の関わりを保持しつづけたようにおもわれます。例えば、安居院の僧達は、祖先澄憲と同じように皇室と親密な関係を保ち、「フルナ」（説法で有名な釈迦の弟子）の弁舌とたえずなぞらえられていました。また、願文類などによりますと、こうした僧達は、やはり澄憲と同様に皇室の追善供養において普賢菩薩・十羅刹女像を供養しました。

普賢菩薩十羅刹女像といいますと、まず浮かんでくるのは、よく知られている『玉葉』にあるひとつの例でしょう。故皇嘉門院追善のための一品経供養です。九条兼実が、説法がうまいとの理由で、澄憲僧都を選び、女院の女房が自ら『観普賢経』に描写されている普賢菩薩並びに『法華経』の「陀羅尼品」しか現れてこない十羅刹女の仏画を描きあげたケースです。

文献1をご覧ください。

\*スライド1：ご覧になれるように、このスライドにあるイメージは、奈良国立博物館所蔵の普賢菩薩十羅刹女像の一部です。宮廷に住んでいた方々に馴染みぶかい白い象に乗っている菩薩の廻りに、いわゆる十二単姿の女房が配置され、密教的な修法の普賢延命菩薩と違うタイプです。

文献1：『玉葉』養和二年（1182）正月十二日、所出 国書刊行会本、以下同じ

「……、此日、旧臣女房等、奉供養結縁経、講師澄憲僧都、籠僧之中、無堪説法之輩、而於今之一品経者、聊有可演旨趣之事、故院御平生之昔有此御願、即近臣女房等手自書之、其中薬王品ハ、自筆所令書給也、然間、其功未及半、自然涉年月、其願遂黙止、今遇此崩御、恨之尤切、不知手足所措、爰近臣之陪妾仕女等、開彼旧経等、拭紅涙鳴咽、往年之結衆、或有終命之者、或有遁世之類、当時祇候之輩、各補其闕、又添莊嚴、此中余女房、自筆書写般若心経、為答芳恩也、普賢菩薩、并十羅刹女、一鋪半、女房等手自所奉図也、依有如此等之子細、殊所請能説也、」

よく調べてみますと、これは決して、特殊なケースではないことがわかります。今まで把握されていない同様のパターンが潜んでいるのです。他の例を述べる前に、まずその背景を説明しておきたいとおもいます。

安居院流とは、藤原の通憲こと信西入道一門のいくつかの子孫の中の流れのひとつです。澄憲は、信西の夥しい息子たちの中の第七番目の子で、院政期に

栄えはじめた天台宗の唱導の一流派の始祖です。

## 澄 憲 の 一 族

この仏画の意義と澄憲の安居院流との関連を考慮する前に、信西一門は絵画制作と縁遠いと決していえないことを指摘したいとおもいます。

澄憲の親戚を見渡しますと、澄憲の父親にあたる信西が作者か編者かと思われている文学や種々の記録は、わりと数多く残っておりますが、絵の方は、違います。残ってなくても、信西と関連している美術作品は、少なくありません。その中に信西が唐の玄宗皇帝と楊貴妃の故事を「長恨歌」絵巻に仕立てた

『玉葉』建久二年（1191）十一月五日

「抑長恨歌絵相具天、有一紙之反古、披見之處、通憲法師自筆也、文章可褒、義理悉顯、感歎之餘、寫留之、其狀云、「唐玄宗皇帝者。近世之賢主也。然而慎其始弃其終。雖有秦岳之對禪。不免蜀都之蒙塵。今引數家之唐書。及唐曆。唐紀。楊妃內伝。勘其行事。彰於画函。伏望後代聖帝明王披此函。慎政教之得失。又有厭離穢土之志。必見此絵。福貴不常。榮樂如夢。以之可知歟。以此函永施入室蓮華院畢。于時平治元年十一月十五日。弥陀利生之日也。」此函為悟君心、予察信頼之辞、所画彰也、當時之規模、後代之美談也、未代之才士、誰比信西哉、可褒可感而已」

『玉葉』の書きかたは、必ずしもはっきりしてはいないので、現代語に翻訳する場合も、あいまいな「絵にした」ほうがよいかもしれません。権力が振るえる者は、戦争をする時、槍一本も投げないし、都を作る時も、釘一つも打たないでいいのは、常のことですけれども、信西の場合は、自らこの絵を描いた可能性も、十分にありえるのではないのでしょうか。「平治物語」になりますと、金刀本のように「人の奢りひさしからすしほろし事を申さんか為に安祿山を絵にかかせて大なる三巻の書を作て……」とされて、その他の、『平治物語研究、校本篇』の中の、十本は全て、「絵をかきて」という形をとっています。

他に、「久能寺経」の内の「観普賢経」を制作した事もあります。

それに加えて、六十余年前、福井利吉郎氏が指摘された事です、信西を『年中行事絵 [巻]』の背後の制作者と名指した事をもう一度考慮すべきとおもいます。『岩波日本文学講座』所出「絵巻物概説」、昭和八年（1938）

『彦火々出見尊絵』は、信西の『日本紀鈔』となんらかの関係がある可能性も考えられるとおもいます。その他に『大悲山縁起』は、もしかすると、絵巻

の素材のために書かれたのではないかと想像できるとおもいます。又、信西が『古楽図』をもったこと、四天王寺の絵解きの僧を訂正したことがあるということを考えあわせると、信西の絵についての関心と知識は相当深かったに相違ありません。

『台記』久安四年（1148）九月二十一日

「……次御絵堂令僧説絵。于時余与信西侍左右、僧有謬誤改正。」

## 紀伊の二位

そして信西の妻も絵画づくりと関係があるようです。通称紀伊の二位は待賢門院・上西門院、両女院の女房で、『源氏物語絵巻』や、所謂『目無し経』の下絵の書き手ではないかと言われております。

## 勝賢と成賢

信西一門の中に、澄憲の弟、勝賢僧正、と彼らの甥、成賢僧正という真言僧の流れがあります。その二人と絵作りとの関係は濃いと思われる事実があります。勝賢と成賢両方は高僧で（醍醐寺の座主など）絵仏師ではありませんでしたが、アメリカには、ふたりが書き写したものが所蔵されていますが、その中に絵がかなり入っています。二人とも所謂「目無し経」と関連したという事実と柳澤孝氏が報告した白描「高雄山曼荼羅」の写しとの関係の事も考える必要があるとおもいます。

柳澤孝の「高雄曼荼羅の白描本」、『美術研究報告「高雄曼荼羅」高雄曼荼羅の研究』の解説によると、心覚からうけた白描曼荼羅を、高野山で勝賢がその写しを作ったのち校閲して、「金剛資勝賢了」と「両返校了」をおもてに記した。後にその「先師前権僧正持本」となる写しは、伝領して「東寺末葉成賢」のものとなった。

勝賢は特に図像制作に積極的でした。そのうえ、図像集成に大いに貢献した心覚と覚禅両阿闍梨と交流がありました。

それで、唱導資料といえ、あるひとつの「表白集」から見える絵と関係している事実もあります。勝賢の「高野往生院心覚阿闍梨追善願文」によると、

久能寺経の結縁に参加した心覚のため、理趣会曼荼羅絵をかきあげたとあります。文献2をご覧ください。

文献2：「高野往生院心覚阿闍梨追善願文」、所出杏雨書屋『春秋経伝集解残巻』紙背「表白集」、又は『群書類従』巻第八百二十五、「表白集」

「……。加之阿闍梨成賢者、弟子骨肉之親弟也。自去年以来令住当山。此代遇質为致水菽也。爾時寒谷冬朝不可抛汲水之役。深洞夜雪豈又忘作床之儀。今太陽之光不留。中陰之景将滿。聊設造仏写経之善。抽知恩報恩之志。奉図絵理趣会曼荼羅一舖。奉模写般若理趣經十二卷。

## 静 賢

澄憲の兄、静賢法印は、安居院二代目、弟澄憲の安居院を継いだと言われます。彼は後白河院の蓮華王院の執行でもあり、数々の絵巻がはいっていた宝蔵を管理したであります。その在任中に絵師明実には『後三年 [合戦] 絵 [巻]』を描かせた事があります。

『康富記』承安1（1171）、近藤好和、「小代宗妙伊重置文と静賢本後三年合戦絵巻の伝来」、『国学院雑誌』、昭和六十年九月。

その他に絵巻の素材になったような「矢田寺縁起」の作者でもあります。

『諸寺縁起集』、建永2（1202）9.24、渡浩一、「絵解きと矢田地蔵縁起」、「一冊の講座絵解き－日本の古典文学、3－」（1985）、静賢の「祖本は絵巻物であった可能性が高い」p.260

## 安居院の場合

澄憲と静賢の安居院の活動に戻りますと、安居院の『言泉集』という唱導資料集を成立させた要素は、1. 親孝行の「孝と追善」、2. 「現世利益」、3. 「勸進」とされています。

安東大陸、「『言泉集』を成立させる要素－「孝と追善」・「現世利益」・「勸進」、『別府大学国語国文学』第19号；と「『言泉集』の歴史的背景」、『説話文学研究』、第十三号（1988）

安居院の僧達の説法活動も、この同じ三つの要素が含まれていたと思ってよいとおもわれます。勸進運動と追善供養の時、縁起絵巻と仏画は、特別な役割を演じています。安居院という組織そのものが絵画制作と関連があったようで

す。文献3をご覧ください。たとえば、天台座主慈円の『門葉記』に入っている起請文で、いくつかの荘園を安居院四代目の聖覚に譲りました。その荘園は凶仏をまかなうためだったとおもわれます。

文献3：「門葉記」、卷九十一（勤行二）、『大正新修大藏経』

件庄園伝領之輩為王弱之間。每處違亂。爰権僧都聖覚領掌之後。為小僧房領。仍経院奏達執政多以令洛居了。然而国友庄為其本而未被返府之間。凶仏写経用途所令不足也。所領雖似有。具地利誠有若亡。彼沙汰切畢之後可令一定賦。件領等可令聖覚僧都門跡永領掌也。

そして、寛元元年（1243）、勝尾寺の再建のため、その寺の僧が安居院に依頼して縁起絵巻を制作していました。

福田見、『神道集説話の成立』1987、「中世の文学」1976と赤井達郎、「語りと絵解」『日本芸能史』、1982。

「勝尾寺毎年出来大小事等目録」、所出「箕面市史、資料編一」

「為勸進本堂薬師百齐国請観音礼拝、於奉出京……其時当寺四巻絵……絵用途十余貫也、於安居院被書之」

また、安居院十二代、覚守大僧都は、妙法院の『山王絵詞』の撰者とされています。

下坂守、「山王靈験き」の成立と改変」、京都国立博物館『學叢』、第十一巻、（1989。1）

以上の例を見ても、安居院は何らかの形で絵画作りと関連があったという事がお分かり頂けるとおもいます。

### 安居院と普賢十羅刹女

更に、普賢十羅刹女像が本尊にされた法会を唱導資料から探しますと、安居院の僧が導師として説法した時の例は、圧倒的に多い事が分かります。色々な例を紹介しておきたいとおもいます。

十三世紀における皇室関係の追善供養の詳しい記録は、かなり珍しいので、まず、記録がわりと豊富な鎌倉末期、十四世紀の始めからさかのぼって見る事にしたいとおもいます。

安居院僧達と普賢十羅刹女像の場合を見ますと、先程、述べた安居院十二世

の覚守大僧都は、伏見院が父親の故後深草院（1243-1304）の一周忌供養の願文にもとづいて、導師として説法した時、普賢十羅刹女が供養されて、その絵像は故後深草院の「御衣」（ぎょい）に描かれました。

文献4aをご覧ください。

文献4a：「伏見上皇願文」所出、『鎌倉遺文』、二二二六三

奉図絵普賢菩薩並十羅刹女像一鋪、此像者饒先皇平常之御衣、図願王端嚴之真聖靈受持法華之故、崇此尊像、法華值遇聖靈之故、画彼羅刹

それと同じように覚守が説法した時、昭慶門院も、父親の故龜山院（1249-1305）追善供養の願文に、また、普賢十羅刹女像が描かれました。文献4bをご覧ください。

文献4b：「昭慶門院、憲子内親王、願文」、所出『鎌倉遺文』、二二三七二

昭慶門院奉図絵普賢菩薩十羅刹像等一鋪斯像者、以聖靈宸筆之料紙、成普賢尊像之図絵、……

覚守の兄弟ひとり、安居院十一代目である憲基大僧都が説法した時、恒助法親王が催した故後深草院一周忌供養のための諷誦文による、文永年間一周忌の先例により、同様に普賢十羅刹女像が描かれました。文献5aをご覧ください。

文献5a：「無品（恒助）法親王奉為後深草帝周忌修冥福誦誦文」所出『鎌倉遺文』、二二二七四

奉図絵普賢菩薩、並十羅刹女等像一鋪、斯像者、令模文永一周之先規、所企図絵向像之新誠也

更に後伏見院の故龜山院追善供養の願文にはやはり同じイメージが使われました。文献5bをご覧ください。

文献5b：「後伏見上皇願文」所出『鎌倉遺文』、二二三七五

奉図絵普賢菩薩並二聖二天十羅刹女像一鋪

覚守、憲基のもう一人の兄弟、澄俊大僧都は、安居院十五代目です。花園上皇が父親の故伏見院の為に催したささやかな仏事に、澄俊は導師を勤めて、本尊を普賢像にした上に、上皇とその女房が旧院の御衣にそのイメージを描きました。「花園天皇宸記」

さて、ふりかえって、鎌倉中期、十二世紀にわたっても、安居院僧も同じような勤めをはたしました。そこには、似たようなパターンが見えます。

異本「続古今和歌集」に見える安居院十代目、憲実の歌「さむる夢の 面かけまでや うかぶ



らん きさの小川の「在明の月」は、普賢菩薩のイメージをうまくもじっているようにおもえます。この歌は、一見しただけは、単なる『万葉集』の大和のきさの小川のうたの本歌どりかのように思えますが、じつはそれだけではなく、この歌のひとつ前にある詞書は、「弘長元年六月亀山の仙洞にて如法写経し侍りし時、十重供養の散花、従一貞子調じてたてまつりしむつびはなに」や、さらに当該の歌の詞書「同じ仙洞にてかさねて如法写経し侍りしとき、普賢大士白乗像の夢の心をよみ侍りける」を考えあわせると、「きさ」、すなわち「象」が、さらにダブル・イメージになって投影されていることがわかります。

先に述べました文永年間先例は、後嵯峨院の一周忌と思われませんが、残念ながら、記録に残っていないことから、確かめようがありません。ただし、幸いなことに、後嵯峨院の母親承明門院のケースは記録に残っております。

安居院九代目である聖憲大僧都についてみますと、故承明門院追善供養の際、正親町院と仙華門院が祖母のために、正嘉元年（1257）八月十四日女房一品経追善供養のスポンサーとなって、聖憲は導師を勤めました。文献6をご覧ください。その時の表白記録と願文のいずれにも、普賢菩薩ならびに十羅刹が登場しています。

文献6：「承明門院御忌中諸僧啓白指示抄」所出 平岡定海、『日本寺院史の研究』

「十四日……経

例時之次、先有女房一品経供養、御導師聖憲

御仏 普賢菩薩像一軀、並十羅刹女像各一軀」

文献：「承明門院御忌中願文集」、「承明門院御葬中願文抄」、「一品経願文、女房」所出東大寺図書館本

「同経経王……之功奉……普賢菩薩並十羅刹像一舖」

### 澄憲の息子達

澄憲の息子について述べてみたいと思います。安居院四代目聖覚は、皇室と関係が深く、よくその仏事を勤めました。特に女院、その大施主の中には、八条院、七条院、宜秋門院、宣陽門院、承明門院、北白河院があります。皇室の葬式と追善供養もよく勤め、聖覚は故後白河院のための仏事のみならず春華門院、練壁門院、土御門院、後堀河院の追善供養を勤めました。

聖覚が死んだ日には、勿論、聖覚自身が導師として説法できませんでしたが、

別の安居院僧（貞恵）が聖覚の代わりに勤めたようです。その御乳母（成子）が催した故後堀河院の為の仏事においては、旧院の御服に普賢菩薩が画像されました。

『明月記』、嘉禎元年（1235）三月五日

五日、天快晴、早旦二品於旧院被供養普賢画像、以旧御服図之、……御儼法之次貞恵為講師、法印追日弱由申、

今まで申し上げた例は、活字になっている資料から主にとりあげましたが、これから翻刻されていない、多少珍しい文献からの例を紹介させていただきたいとおもいます。

### 海恵僧都の「海草集」の例

牧野和夫氏が解説されましたように『海草集』というのは、建仁年間（1201-2）から建永元年（1206）までの五年間に、海恵僧都が書いた、表白、嘆徳、願文の唱導のジャンルを集めたものです。海恵僧都は安居院の僧ではありませんでしたが、父澄憲の真弟ですから、その影響は強かったに違いありません。

牧野和夫、「『海草集』影印・解説（調査報告三十一）」、実践女子大学国文学研究所「年報」、第十号（1991.3）

文献7をご覧ください。『海草集』の中にある、八条院が母親の美福門院のための追善供養の表白は興味深いものです。その中の句をよみますと、次のようになると解釈します。

普賢薩捶のせいなるかたちを修復して

……………羅刹十女のそんぞうを図絵した

それで、「母儀（つまり美福門院）のへいぜいのしゅひつなり」という句があります。

これは、美福門院自ら描いた絵像かと思えますが、そのすぐ前の句、「そのていは木にもあらず、石にもあらず」を考えますと、自ら書いた物の料紙で作

った物かのように解釈するほうが適切と思われます。いずれにしても、美術史上の意義があり、いままで学会でとりあげていないケースだと思われます。

文献7：『海草集』、牧野和夫、『「海草集」影印・解説（調査報告三十一）』、実践女子大学国文学研究所「年報」、第十号（1991.3）

「八条院普賢供養表白」

今禪定仙院（八条院）……修復大慈大悲普賢薩捶之聖容。図絵二聖二天羅刹十女之尊像。……其躰非木非石。便是。母儀仙院平生之手筆也。……今新造六牙之白象。奉乗営一基之厨子。奉安之厨子四方。奉図葉王勇施。多聞持国。十羅刹女之形像。……

## 澄 憲 自 身

これまでは、普賢十羅刹女のイメージの事と、安居院と絵画づくりの「なんらかの関係の」事しか述べておりません。残念ながら、その二つを結ぶ、具体的な証明がありませんが、澄憲自身に絵描きの経験や才能が全くなかったとはいえないのです。

たとえば、美術の範疇に入らないでありましょうが、石山寺のあぜくら聖教の内、一枚の「明観察智曼荼羅」に澄憲の著（署）名があります。

スライド2. 「明観察智曼荼羅」

ところで、澄憲は説教師として顕教の僧でありながら、つまり仏の教えを在家の人々に普及するために勤めた者ですが、密教的な様子（つまり大日遍照の内に弥陀は在する）は、御覧頂けるように、ないわけではありません。

櫛田良洪、「唱導と釋門秘鑰」、「印度學佛教學研究」第一卷第一号（昭和27, 7）

『心記』によりますと、後白河院の追善供養の一つに、澄憲が大日の供養に導師として勤めようとした時、顕教の僧澄憲は相応しくないのではないかという説もあった。

それは別として、

澄憲が勤めていた追善供養をみますと、故高倉院の為の追善供養では、澄憲僧都が疑いなく、故高倉院のために導師を勤めたことがあります。その時、院の女房等が一品経供養のため、銀を使って普賢菩薩像を鑄造する事にしました。文献8をご覧ください。その他に、源通親の『高倉院昇霞記』で高倉院は、崩御

直前、自ら注文した「普賢の十羅刹」絵は、皮肉にも御忌中に供養された事になりました。生憎、通親はその供養の導師の名前を残しませんでした。

文献 8：「玉葉」、治承五年（養和元年，1181）、二月十四日

十四日、天晴、……今日、於高倉院御喪家、女房等、奉鑄銀普賢菩薩像、各書一品經奉供養、澄憲僧都為導師、說法驚耳云云

文献：「高倉院昇霞記」、所出水川喜夫、『源通親日記全釈』

「普賢の十羅刹を描かせて参らせよ。」と承りて、失させて給ひて後、描き出でたるを見るも心惑ひつつ、……法華堂にこれを懸けて、御忌の中にこれを供養すとて、

後の世のしるべともせよ君がためと思ふ心はかねて知りけん

御仏供養とて、諷誦書きて、かやうの物を御覧じて、興ぜさせ給しものと、……

故九条良通の為の追善供養において、澄憲法印が導師を勤めた時、良通の母が息子の為、「先年」自ら描いた普賢絵像を供養しました。（もしかすると、故皇嘉門院の時のと同様の尊像であるかもしれません。）文献 9 をご覧ください。

文献 9：『玉葉』文治四年（1188）四月八日

八日、此日正日也、……仏、普賢絵像一舗、件仏、女房先年自図之、今為亡息所遂供養也……  
導師澄憲法印

定能卿の『心記』の断片によれば、後白河院の崩御の後、僅か三週間たらずの間に十一回、澄憲が仏事を勤めました。その内、一番面白いと思われるのは、式子内親王の等身の普賢と、内親王自ら金泥の普賢十願を書いた事でしよう。その他の仏事に阿弥陀像が多い中で、普賢像が四回供養され、その内、澄憲と聖覚が導師を勤めたのは三回でした。

しかしながら『心記』建久三年四月二十七日の条に、「法橋宋円絵像普賢十羅刹經三部導師雅縁……」ということも書いてありますが、その意味は必ずしもはっきりしていません。他の日々の書き方と違います。宋円が描いたのか、あるいは、宋円の仏事であったのか、決定できません。

どうやら、あたかも澄憲が普賢のイメージを特に好んだ例として、追善供養以外にも普賢像を使った場合があります。

澄憲僧都の「和歌政所一品經供養表白」にも普賢菩薩像が出てきます。

その中に次の句があります。

図絵十種願王之尊容。……図十願六牙之聖容。

### 澄憲僧都の「源氏一品経供養」

澄憲の「源氏一品経供養」については、間接的なことですが、美福門院加賀という女房が施主だったとも推測されています。彼女は有名な異父兄弟藤原定家・隆信、の母親で、久能寺経の一品経に参加した美福門院女房伯耆の娘です。加賀を施主とする根拠は、この「源氏一品経供養」の時のものとされる一品経において、息子である隆信が、紫式部の菩提をとむらうため「陀羅尼品」を選んで、羅刹女にむかって次の歌を詠んだとするされていることです「夢のうちも 守る誓の するしあはば 長きねぶりを 覚せとぞ思ふ」。

## 澄憲と女院

澄憲の女院の仏事について、二、三述べてみたいと思います。待賢門院の出家については、『土去抄』という鎌倉中期の「密教の教相・事相にわたる逸話・秘話から雑々の高僧名僧の逸話類に至る幅広い言説の蒐集からなる」未刊書の中に待賢門院が出家した時（1142. 2.26）の供養願文が、若い時の澄憲の進言により草案されたとの記述があります。文献10をご覧ください。

牧野和夫、「『親快記』という窓から－中世初期の説教史料に関する一、二の問題－」、『中世文学』第三十二号（1987）

『土去抄』によりますと、待賢門院が出家した時、「母儀御手跡を普賢菩薩に張り奉られた」とあります。「張る」という動詞は、又、「はりこ」のような物をさし、先的美福門院の例のようにペーパーマシェの仏像と考えられるとおもいます。

文献10：『土去抄』、参考牧野和夫、「『親快記』という窓から－中世初期の説教史料に関する一、二の問題－」、『中世文学』第三十二号（1987）

澄憲聖覚於説道者面々執之歟於文骨風月者澄憲勝聖覚劣也待賢門院御出家之時以母儀御手跡被奉張普賢菩薩有供養之時御願文俊憲草之其時澄憲自然而俊憲之許対面之次申出此子細雲髮首ハ聖靈所撫也垂テモナニカセント云句ヲ欲書其片句未案得何体ニカ可書思惟スル也ト被語之時澄憲暫案雲髮ト候者月輪ナト体候ヘガシト申間誠尤可然トテ其ノ定ニ月輪ハ今弟子カ所帰也云云俊憲後日被感澄憲也……省略……

故建春門院の追善供養は、冒頭に申し上げた故皇嘉門院の場合より六年前になりますが、安居院の唱導資料の『天法輪抄』、『澄憲作文集』などの中の表白によりますと、建春門院の中陰に、普賢菩薩のイメージが文献11を見て頂くと、

おわかり頂けるとおもいますが、女房によって故女院の御服に描かれたと思われ  
れます。

文献11：「澄憲作文集」、「覆貝表白」	『転法輪鈔』、「同院御中陰貝經供養表白」
大曾根章介、『中世文学の研究』	永井義憲、清水有聖、『安居院唱導集、上巻』
兼又有聖靈御悩之間 纏貴跡御服以洗舒	兼又有聖靈御悩之間 有纏貴体御服以洗以舒
奉図普賢	奉図普賢願王
其後素之妙	其素之妙
偏成于宮人之丹心	偏出宮人之丹心
其画図之様	専成於侍女之白業
只化侍女之白業	

次に、『十二本表白集』の中の澄憲の表白について、述べさせて頂きたいと  
おもいます。大谷大学図書館蔵、未刊書、明治写本『翰林拾葉』の「上西門院  
奉為待賢門院一品經供養表白」があります。未だに知られていない歴史的な事  
実、すくなくとも美術史的な事実と思われるので、ここで皆様に披露させて  
頂きたいとおもいますが、時間が足りないようですから、要点だけ述べさせ頂  
きたいとおもいます。

文献12をご覧ください。この表白は、澄憲が、まだ僧都だった時代、つまり仁  
安元年（1167）から寿永二年（1183）までの間、供養した次第です。この中で、  
上西門院は母親の待賢門院が四十余年前、自ら書いた法華經二十八品の首題を  
再利用して、一品經供養にした時、一般的にあまり漢字を書くのが堪能ではな  
い女人を集めて、それぞれ一品ずつ、法華經をかきあげて貰いました。その上、  
同じ女人達が自ら普賢十羅刹女像も描いたという記述があるのです。

文献12：「上西門院奉為待賢門院一品經供養表白」、所出『十二本表白集』、『翰林拾葉』  
……夫 已今当諸經之裏 以法花而為最尊。空假中三諦之門 以実装而為究竟。四十余年之前  
方便之門未開。五十記座之後 真実之相始顯。……爰我君禪定女院。……然、間母  
儀前待健門院。昔有書写法花廿八品首題。伝得掌中 懐旧之腸忽摧。披見眼前 恋慕之涙難抑。  
仍得彼旧題名。方写此新經卷。唯、聖靈之御筆詵女人以書之始自後宮。仙院至于親踈貴賤撰婦  
女之堪執筆。分品々令書写之……又詵女人図十願王十羅刹之聖容。……実是鄭重之報恩  
也。抑又希代之勝事歟。觀夫六書八牀者婦女所不堪也。今勸三十三人而分卷軸。……

## 久能寺経関係か

待賢門院の出家と法華経一品経供養について申しますと、まず、待賢門院中納言が俊成に送った法華経二十八品歌の題の事と、俊成が詠んだ和歌と久能寺経の見かし絵との関係について考えられる方も多いとおもいます。

これは、あまりにも複雑な問題ですから、いまは、詳しく論じる事ができませんが、その時の首題は、御存知のように、西行の釈教歌にもあらわれています。

## 西行俊成法華経廿八品和歌

西行法師の家の集のひとつ、『聞書集』にある法華経二十八品歌は、「永治二年（1142）二月二十六日の待賢門院の落飾に際し、結縁のために私的に詠んだ手控えのものと考えられている」とのことです。

桑原博史、「西行の『聞書集』をめぐって」、『新論和歌文学』、森本元子、明治書院、1982  
文献13をご覧下さい。その法華経廿八品歌の中の「陀羅尼品」の題として十羅刹女の約束の中の詞、「ないし、夢の中にてても又復（またまた）、悩ますことなかれ（なからん）」の後にこの歌があります。

「ゆめのうちに さむるさとの ありければ くるしみなしと ときける物を」

文献13：『聞書集』、参考 山田昭全、「西行法華経二十八品歌評」、「大正大学研究紀要」70号、（1985）

陀羅尼品、題：乃至夢中 亦復莫惱

「ゆめのうちに さむるさとの ありければ くるしみなしと ときける物を」

山田昭全氏によると、「この一首、はなはだ難解」と言われています。氏は「『観普賢経』の所説をふまえ、それと陀羅尼品とを突き合わせる形で歌っているのだ……」と説かれています。

山田昭全、西行法華経二十八品歌評、「大正大学研究紀要」70号、（1985）

さらに、山田氏は、こう言います。「不思議なのは、俊成もこれとまったく同

じ題で、「うつつには さらに言わず ぬるたまの ゆめのなかにも はなれやはする」と歌っている事実がある。歌題の「亦復莫惱」（またまたなやますことなかれ）に相当するところを「はなれやはする」というのは解せない。これもどうやら『観普賢經』のさきほどと同じところ……に基くものようだ。」といわれます。（山田、上と同様。）

文献：『長秋詠藻』428、題：乃至夢中 亦復莫惱

「うつつには さらに言わず ぬるたまの ゆめのなかにも はなれやはする」

文献：『法華經』、『陀羅尼品』

爾時有羅刹女など。一名藍婆二名……是十羅刹女……俱詣仏所。同声白仏言。世尊。我等亦欲擁護。読誦受持法華經者。除其衰患者。……乃至夢中。亦復莫惱

（その時に、羅刹女とうあり、いちをば藍婆と名づけ、二をば……この十羅刹女……ともに、ぶっしょにまうでて、こえを同じくして、ほとけにまうしてまうさく、「せそん、われらもまた、法華經を読誦（よみ）し受持せん（うけたもたん）ものを擁護して（まはり）、その衰患をのぞかんとおもふ。……ないしゆめのなかにもまたまた、なやますことなからん。） 妙一記念会館蔵、「仮名書き法華經」より

文献：「観普賢經」

「普賢菩薩復更現前、行住坐臥不離其側。乃至夢中常為說法。此人覚已得法喜樂」

（普賢菩薩またさらにげんぜんして、ぎょう、じゅう、ざ、が、に其のほとりを離れず。乃至夢の中にも常に為にほうを説かん。此の人さめおわってほうきのらくを得ん。）『訳妙法蓮華經並開結』より

なお、同じ題で、安居院十二代の覚守法印の和歌もありますが、どうやら同じ組み合わせではないようにも思えます。あるいは、「うれへなき身のよろこび」というところも「観普賢經」の同じくだりにもとづいているかもしれません。

『詠法華和歌』

「法の為 うれへなき身の よろこびは 夢のうちにも 数の身ぞそふ」

こういう和歌のなかにおける普賢菩薩と十羅刹のことばの組み合わせは、似たくだりがあるので連想が生じたのかもしれませんが、もうひとつの可能性は、このような和歌が、普賢菩薩十羅刹女像という仏画を反映していることの想像が十分に可能かとおもいます。

最後に、西行は、待賢門院や上西門院の女房、そして絵描きといわれている信西の妻、紀伊の二位などと友情関係が深かった事をあらわす一文をご紹介します。と思います。

『山家集』のうち、雑817から826は、「院の二位の局みまかりける後に、十集歌人々詠みける



に」に相当しますが、そのうちの、たとえば、822「のちの世を とへと契りし 事の葉や  
忘らるまじき 形見なるべき」には、はっきりとその親しさを読みとることができます。

## 結 論

色々な文献、特に唱導のジャンルを調べてみますと、安居院僧達は代々普賢菩薩十羅刹女像と、深くかかわっていることがわかります。安居院の絵画づくりと、普賢十羅刹女像という仏画制作の具体的な関係については、まだ不明な点が多いとしても、先に数回述べたパターンが、ほのかに見えるようになってきました。

最後に今まで申し上げました事柄を整理してみますと、

1. 安居院と皇室の追善供養のかかわりは澄憲の時代から鎌倉末期まで続いたこと。
2. その供養に普賢、又は、普賢十羅刹女像がしきりに登場したこと。あたかも安居院専用のイメージとして。
3. その法会は、よく一品経だったこと。とくに女房一品経供養であったこと。
4. 女院は、主催側の施主か供養をうけた故人だったケースが多いこと。
5. 女院かその女房は、積極的に参加し、ときには、自分でもその仏画を描いたこと。
6. 故人のころもに普賢か普賢十羅刹女のイメージを描いたこと。
7. 普賢のイメージは、しばしば料紙、英語でいうペーパー・マシェでつくられたこと。

などがわかります。

このようなパターンを把握しますと、『聞書集』や『長秋詠藻』のような文学作品の背景がもっと深く理解できるとおもいます。

なお、今日は、時間の都合から省略させて頂いたところが多くあります。そうしたところもふくめまして、全体の論旨は会議録に掲載させて頂くことにな

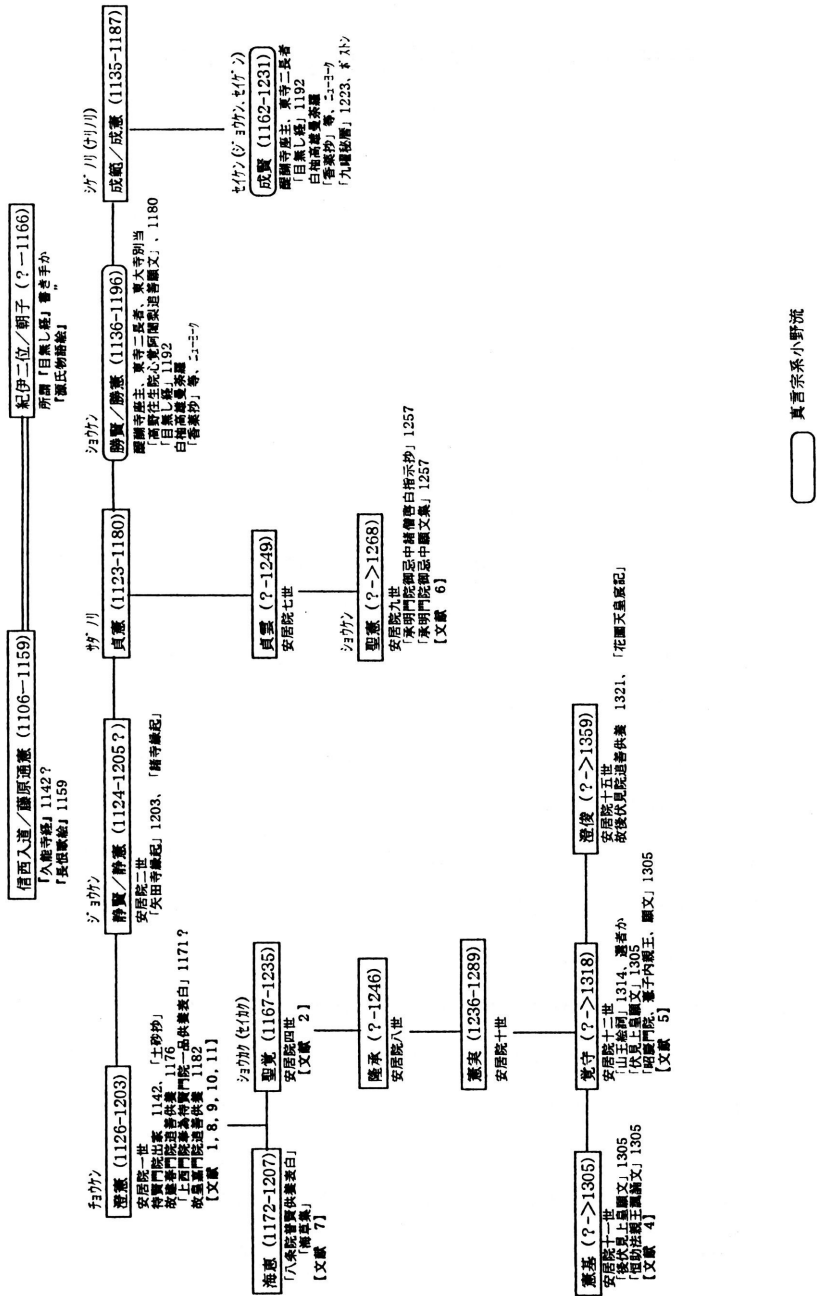
っていますので、そちらをご覧頂ければ幸いです。

最後に、以上は、一人の学究の徒として研究する中で、国文学という分野だけでは十分に解決できない様々な疑問の渦の中で私なりに見いだしたつたない試みです。美術史という、もうひとつの分野への学問的な連絡の糸口になればと願いつつ終わらせて頂きたいとおもいます。ご静聴ありがとうございました。

## 討議要旨

ミュンヘン大学のニールス・ギェルベルグ氏から「木石にあらず」という点についての質問があった。筑波大学の名波弘彰氏からは、法華経女人信仰といった観点からの意見が述べられた。

安房院流唱導における国文学と美術史の連絡—普賢菩薩・十羅刹女像を中心として



真言宗系小野流